

後藤信哉先生

樋口陽子

岡小天の十七回忌に

学者としての父

家庭での父

樋口陽子

日本バイオロロジー学会学会誌 (B & R) 2007

第21巻 第2号 pp. 12-24. (52-64)

第3号 pp. 30-38. (114-122)

岡小天の十七回忌に一学者としての父，家庭での父

2007年 樋口陽子



写真1：岡 小天，ポワズィユ賞受賞記念，昭和49年（1974）12月。

目次

初めに

1. 出自，家族と出生，養子，一高，東京帝大
2. 大阪帝大，結婚，博士号
3. 小林理研，“Equation of OKA”，子供達と学習院
4. 第二次世界大戦
5. 手島祖父母との同居
6. 小林理研理事，学習院大学，『生命とは何か』，日本高分子学会副会長，『誘電体論』，Reports on Progress in Polymer Physics in Japan，『固体誘電体論』
7. 義宮正仁親王殿下
8. 東京都立大学，日本生物物理学会，国際血液学会議，国際雑誌Biorheology 編集委員・編集顧問，国際ヘモレオロジー学会，国際バイオレオロジー学会副会長，日本高分子学会名誉会員
9. 慶応義塾大学，日本高分子学会功労賞，杏林大学，『レオロジー』，ポワズィユ賞，藤原賞，国際動脈硬化シンポジウム，国際脈管学会議，国際血液学会議，日本バイオレオロジー学会
10. 国立循環器病センター研究所
11. 盛亜州氏と馬（岡田）蒸
12. 学士院賞，勲二等瑞宝章，Cardiovascular Hemorheology，名誉所長として帰京
13. 日本物理学会名誉会員，『バイオレオロジー』，金婚式
14. 『業績目録』
15. ご友人方，お仲人
16. 趣味，旅行
17. 軽井沢と北軽井沢
18. 入院，逝去
19. 没後，Oka Memorial Award
20. 父と私
21. 岡小天賞と岡小天文庫

終わりに

注

初めに

日本バイオレオロジー学会創立30周年の記念の年に当り、諸先生並びに学生会員の皆様のご活躍と学会のご隆盛を、心よりお祝い申し上げます。

2007年12月3日に満百歳になるはずの父は、2006年10月20日には十七回忌を迎えましたが、未だにそこへフットと歩いてきて会えるような気がいたします。パソコンも電卓すらもない時代に、親指を翳りながら万年筆で原稿用紙を埋め、計算をしておりました。亡くなった2年後の1992年に横浜で開催予定の国際学会の準備を始めておりましたので、せめてそれまでは元気であることを願いましたが、磯貝行秀先生初め諸先生が父以上に立派に成功させて下さいましたことを、天で喜んでいと想像しております。

父が追究いたしました自然の美は、数式や図で表現される豊かな学問世界でございましょうが、その具体的な内容は、不肖の娘にはまったく理解できません。父は受賞や出版の喜びを家族と分かち合いはいたしました。誇ったことはございませんでしたので、新聞報道や追悼記によって研究の意義や評価が明らかになり、感じ入った次第でございませう。亡くなって16年以上経ちまして、在りし日の父に娘として寄り添い、かつ矛盾いたしますが、少し距離を置いて偲べる気持ちがいたします。以下は伝記ではなく、私の心の中に生きております父のプロフィールとさせて頂けますれば幸いに存じます。

生来虚弱な父が、戦前、戦中、戦後の困難な時期に、仕事上も家庭でも重い責任を担い、家族の生活や子供達の勉強のために莫大な時間と労力を費やしつづ、どのようにして自分の研究を続けて参ったのかを考えますと、スーパーマンであったかのように思われます。一人の人間として献身的に家族に尽くし、才能を開花させて優れた業績を挙げ、人生を真っ正直に生きた父の折々の表情や所作など、走馬灯のように巡るさまざまなシーンを回顧しております。家庭での父に対する母と子供達四人の関わりはそれぞれ異なりますので、各人各様の感慨がございませうが、今回は私の勝手な想いを綴らせて頂くことをご寛恕頂けますればありがたく存じます。

2006年6月の総会で、僭越ながら十七回忌に寄

せて父の思い出を述べさせて頂き、内村功学会長、丸山徹年会長、岡小天賞ご受賞の浅野牧茂先生初め諸先生に厚く御礼申し上げます。また学会創立30周年の本年に、佐々木直樹先生より父について学会誌に記させて頂く機会を与えて頂き、思いがけない幸せに感謝申し上げます。怪我のために10月の原稿提出期限が守れませう、まことに申し訳ございませんでした。内村功学会長、佐々木直樹先生、会員の皆様に、心よりお詫び申し上げます。なお、内村功学会長、深田栄一先生、佐々木直樹先生、村田忠義先生、岡田蒸様には、この度特にお世話になり、ありがとうございました。

1. 出自、家族と出生、養子、一高、東京帝大

*出自

養父岡俊太郎（陸軍省人事局補任課）の父は岡西養玄（1839 - 84）で、維新後に待蔵と改名し、後に岡寛齋と称した。明治2年の席順は「第六等席、十三人扶持、書教授試補」¹⁾。私から見て祖父の俊太郎の末妹が父の実母与志で、実父岡田甲子之助の妻である。なお、岡西養玄の父は福山藩医官岡西玄榮の嗣子の岡西玄亭²⁾で、澀江抽齋とは、伊澤欄軒門の同門で、抽齋と共に欄軒五哲の一人と目され³⁾、妹の徳は抽齋の三番めの妻であった。伯父の養子になったことで、父は岡家16代当主になった。⁴⁾ 数年前に、津和野の森鷗外居宅に隣接して新築された森鷗外記念館の壁面を埋める大きな系図のパネルの最下段に、父の従兄、東京帝国大学教授柿内賢信（物理）の名が記されている。

*家族と出生

戸籍上は明治40年（1907）12月3日に東京市青山で、父 岡田甲子之助（現在の東京外国語大学卒業で鉄道省保険課勤務。政府のドイツ語通訳官、翻訳書多数）、母 与志（誠之小学校卒、渡邊裁縫女学校卒）の次男に生まれた。実父が「うんと伸びろの意味をこめて、ただ、天だけでは大きすぎる」と、〈小天〉と命名した⁵⁾。

大正3年（1914）、（旧福山藩主）阿部邸隣の青山師範附属小学校尋常科へ入学。「学校から帰るとランドセルを放り出して遊びに行つて、勉強しなかつたので、通信簿にはおしどり（乙）が並んでいたんだよ。」と語っていた。



写真2：岡田家武（化学科）・俊重夫妻
佐伯修 『上海自然科学研究所：科学者たちの
日中戦争』宝島社，1995年，グラビア2頁。

兄 長男，岡田家武は明治37年（1904）東京青山生まれ。一高，東京帝国大学理学部大学院（5年間）修了。吉林省の塩湖タブスノールでゲーリュサイト（ $\text{Na}_2\text{CO}_3 \cdot \text{CaCO}_3 \cdot 5\text{H}_2\text{O}$ ）という珍しい鉱物をユーラシア大陸で初めて発見して地質学雑誌に予報として昭和3年（1928）に発表し⁵⁾，同年，満26歳で、『岩波講座 物理学及び化学』の一冊として，日本の地球化学で初めての専門書『地球化学』を著した⁶⁾。

昭和7年に上海自然科学研究所勤務。中国名は馬謝民。昭和9年（1934），幕末の藩医の曾孫大槻俊重（中国名は丁月蘭）と結婚 [写真2]。

昭和11年（1936），理学博士。昭和18年（1943），息子蒸が生まれたが，親兄弟，研究所の誰にも知らせなかった。この年に名を馬植夫と蔣月蘭に改めた。

第二次大戦終了後の昭和22年（1947）に，「馬先生」と慕われていた岡田家武（馬植夫）一家は四川省成都へ移住し，中国人になり切ろうとした。中華人民共和国の成立後，1952年に華西大学（校名が四川医学院に変わり，現在は華西医科大学）教授になり，1958年に中国科学院西南分院（現在の成都分院）に転じた⁷⁾。

職場に日本人と届けてあったにも拘わらず，文化大革命勃発の昭和41年（1966）9月14日に，

「間諜活動」の科で逮捕された。蒸は，この時まで，両親も自分も日本人だということを知らなかった。何の連絡もないまま，昭和45年（1970）9月に，伯父が「心臓発作で獄中死した」と公安職員が口頭で伯母に伝えた。遺体，遺骨，蔵書や手稿の返還もなかった。伯母は3ヵ月後に伯父と同じ罪状で連行され，強制労働に従事させられた。蒸も昭和49年（1974）から4年間，強制労働に従事させられた。

母親から父親の弟に岡小天という者のいることを知らされていた蒸が，昭和53年（1978）に労働キャンプで，偶々看守の落とした『参考消息』という中国政府内部発行の新聞の最新号に，父の藤原賞受賞の記事を見つけ⁸⁾，受賞時に勤めていた杏林大学へ手紙を送り，この手紙が国立循環器病センターへ転送されて，父は伯父一家の消息を知った。父は帰国の手続きに奔走した。それまで祖母与志は行方不明になった長男に何とかして会いたいと願ひ，父も伯父を探すべく何度も外務省などに必死で掛け合ったが，昭和35年（1960）に喉頭癌で亡くなった祖母（最勝院釈尼覚譽貞操大姉）の生存中には，生死すら判明しなかったのである。

小柄な祖母は朗らかで，日頃庭先から『小ちゃん元気かい？』と入ってきて，父に「小や」とにこやかに呼びかける。孫達は毎月年金からお小遣いを頂くのを楽しみにしていた。三姉妹にお揃いの金のネックレスも頂いた。当時は貴重な純毛糸の手編みの手袋やソックスは，学習院女子部のバザーで買って下さったお手玉と共に，まだ大事にしまっている。

昭和55年（1980）5月に，蒸の度重なる再審請求の結果，無罪が確定して伯母も蒸も釈放されたが，伯父については当時もその後も正式な名誉回復の通知はないそうである。昭和56年（1981）1月に伯母と蒸が帰国した。このことは中日新聞で「中国で不明の日本人学者：地球化学の岡田博士：文革中に獄死」という大見出しで報じられた⁹⁾。叔父岡田和・多栄子夫妻も非常に尽力され，伯母と蒸はしばらくは叔父夫妻宅に寄寓していた。伯母は先年亡くなったが，蒸は中国専門の東方書店で社長室付対外連絡担当として働いており，家族も幸せである。

弟 三男，故岡田国文。乳児の頃死亡。

妹 長女、故細井詠子。現都立三田高校卒。洋画家日展無鑑査故細井繁誠に嫁す。

妹 二女、故井形宏子。現都立三田高校卒。慶應義塾大学卒、三井鉱山社員故井形健一に嫁す。

弟 四男、故岡田 和。東京帝国大学農学部農芸化学科卒。麒麟麦酒研究所横浜工場副工場長。平成10年(1998)8月没。妻多栄子、^{九段}精華女学校卒。日本画院同人、日本美術家連盟会員。

***養子**

大正9年(1920)、東京府立第五中学校(現都立小石川高校)に入学。

大正10年(1921)、中学2年生の時に実母の兄、岡俊太郎の養子となり、同年12月に、本郷西片町に移り住む。中学2年生の頃から勉強するようになったそうで、理由は養父母にも担任の先生にもわからなかった。風間篤次郎(岡俊太郎の弟で海軍機関大佐)の談では、「養子に来て大変苦労し、奮発したのが原因らしい。」五中の伊藤長七校長に「何をやるにしても開拓の精神でぶつかれ」¹⁰⁾と鼓舞されたことが力となり、高分子物理、生物物理、レオロジーと新しい領域でのバイオニアを志した、教育はこうあるべきだ、と折に触れて語っていた。五中の講堂には「開拓の精神」の額が掲げられ、秋には「創作展覧会」が開かれ¹¹⁾、担任の四宮先生は「君達を信用しているからね」と試験は監督なしだったが「在学中カンニング事件は一度もなかった。」¹²⁾しかし、戦後に生物物理学を始めたときは、物理学者からも生物学者からも異端視され、白い眼で見られたそうである¹³⁾。

思春期の父は、明治憲法下の家族制度維持のために、両親と兄妹弟との温かい七人家族の賑やかな家庭の団欒と離れて、私から見ればやや冷やかな養父母の後継ぎの養子として、義務感を抱いて暮らしたのであろう。岡家には、祖母いつの娘の義姉房子(20歳で早世)、後妻の祖母秀とその娘である義妹の富がいた。富叔母は昭和7年(1932)に仁科武雄(三和銀行勤務)に嫁した。

***一高**

大正13年(1924)、中学4年修了で、第一高等学校理科乙類入学。専攻を「物理にしようか英文学にしようか一時迷った」そうである。永福の家



写真3：一高 明寮10番。左：岡 小天。右：不明。
後列：田上稔治氏。
大正14年3月。

には、『ファウスト』、『シャーロック・ホームズ』、『出家とその弟子』などの文学書だけの書架もあった。家が近いのに明寮10番に2年間入寮し、「蠟(燭で)勉(強)」したり、ピンポンに興じたりした。私の知っている父に、このような時期があったとはとても想像できないが、乗馬部では雪の習志野の原野を駆け巡る。障害物競走で転倒したときのことは、「馬の腹の下ってすごく汗臭いんだよ。」と話してくれた。生涯家族ぐるみでお親しくお付き合いした親友田上稔治、原島鮮、小穴純の方々と、「嗚呼玉杯に花うけて」(旧第一高等学校東寮寮歌。第十二回記念祭寮歌。)を歌いながら、夜遅くまで、本郷通りを高下駄で闊歩して青春を謳歌していたそうだ[写真3]。3年間の成績は、入学時は6番、1学期と3学期は1番、2学期は3番だったそうだが、「(養)父からは一度も褒められたことがない」と私共に語ったことがある。思春期の養子にもう少し優しくしてくれたら、と高校生の父を不憫に思う[写真4]。

後年、大学の校章入りの湯呑茶碗が売り出されたとき、真っ先に懐かしい一高の校章入りを求め、子供達の出身校の湯呑茶碗も順次買ってきてくれた。重病になっても「嗚呼玉杯に」のテープは喜んで聴いていた。秋芳洞の入り口で求めて使って



写真4：一高正門前にて。大正15年3月。
岡小天「青春の記」『高分子』28巻，1979，60
頁。

もらった「玉杯」は、没後には形見になった。

*東京帝大

昭和2年(1927)，東京帝国大学理学部物理学
科入学。

昭和4年(1929)6月7日，徴兵免除で第二国
民兵役に編入された。

昭和5年(1930)3月，同学部卒業。不景気故
に大学院に入り，病気のため，半年休む。物理教
室の寺沢寛一教授の助手となり，田丸卓郎先生の
ローマ字運動のお手伝いもした。

2. 大阪帝大，結婚，博士号

*阪大

昭和8年(1933)4月，大阪帝国大学理学部創
設時に東京帝国大学教授佐藤孝二先生のお世話
で，阪大講師として若い研究者で活気に溢れる阪
大に友近晋教授と共に赴任。長岡半太郎総長室に
は「勿嘗糟糠」という額が掛けてあった¹⁴⁾。廊下
を歩きながら仁田勇先生と呉祐吉先生に高分子物
理を研究することを勧められたことがこの道へ入
る契機となった¹⁵⁾。

*結婚

昭和9年(1934)4月29日(天長節)，佐藤孝
二先生ご夫妻のご媒酌で，母手島典子と結婚の予
定であったが，肺炎のために延期し，11月3日
(明治節)に学士会館で挙式。佐藤先生が在外研
究で滞独中のため，親戚の垂井駿夫妻が代行[写
真5]。

母の次兄秋山朗が父に物理を習っていた縁で親
に説得された母は，津田英学塾1年生だったので
躊躇したが，中退して嫁ぎ，現在の尼崎市に所帯

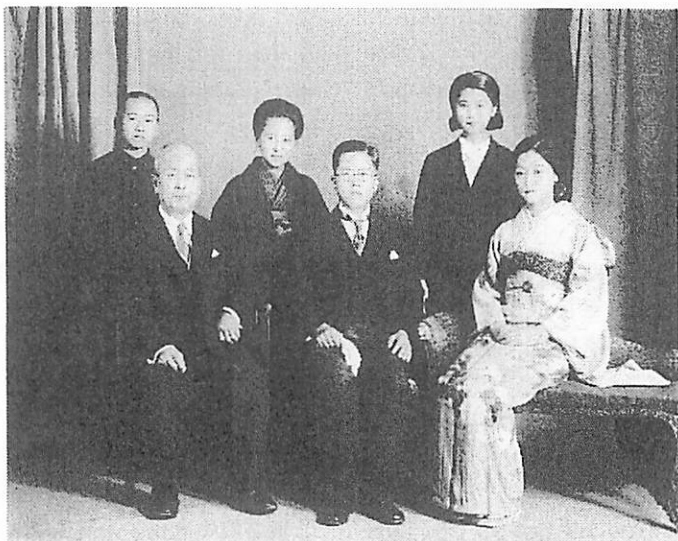


写真5：結婚の頃。前列左から岡田甲子之助，岡 小天，岡(手島)典子。
後列左から岡田 和，岡田与志，岡田宏子。



写真6：尼崎の新居。昭和9年（1934）秋頃？

を持った [写真6]。父は毎月の給料100円未満をそのまま母に渡した。家賃は28円位。阪大が岡辰治教授にお頼まれた受験浪人を教え、大阪歯科専門学校（現大阪歯科大学）でも数学を教えた。母が答案の下調べをして父の時間を助けたとのこと。岡の祖父から借金をしていて、毎月7円ずつ返し、医療費を支払い、時たま手伝いを頼むとやつの生活だった由。母は養父に、「小天は本ばかり買うので・・・」とよく言われていたそうである。

母の父手島周造の祖父は伊達藩岩出山藩一番座家老で、維新政府に「北海道へ行けば爵位を与える」と言われたのを辞退して地域に尽くした。「亀翁明神」として祭られている。祖父は東京帝国大学法学部卒業後、宮内省に勤めたが、上司の失脚で辞し、下井草に家を立て、高田馬場でゴム工場を営んだ。祖母禮は伏見宮家に短期間仕えていた。娘時代のヴァイオリンを私は6年生の時に譲られた。

昭和10年（1935）4月、大阪帝国大学理学部助教授。西宮市に転居。

同年9月14日 長女陽子（あきこ）誕生。よく風邪を引いた。

西宮に越してから、父もほとんど毎月風邪で発熱。気管支炎が昂じて肺炎にもなり、父娘で通院

写真7：阪大にて。左から湯川秀樹先生、岡 小天，伏見康治先生。
昭和11年（1936）3月。

していた。それでも早起きし、夜遅くまでよく勉強していた。この頃、湯川秀樹先生ともお親しく、スウェーデンのノーベル賞委員会からの依頼で、湯川博士をご推薦したそうである [写真7]。

*博士号

昭和13年（1938）7月、理学博士 [写真8]。

昭和14年（1939）2月21日 次女 晃子（てるこ）出生。標準体重以上の元気な子だった。父は他事に煩わされず、相変わらずよく勉強していた由。

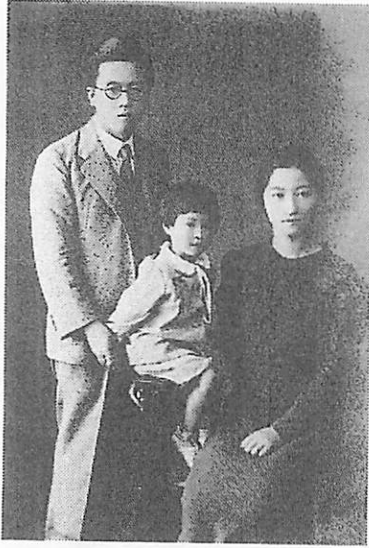


写真 8 : 学位授与記念. 左から岡 小天, 陽子, 典子.
昭和 13 年 5 月 29 日.



写真 9 : Paul J. Flory 博士.

3. 小林理学研究所, Equation of OKA, 子供達と学習院

* 小林理学研究所

昭和 13 年 (1938) 春, 佐藤孝二先生のご紹介で, 小林采男氏が理学研究のために私財を投じて創設された財団法人小林理学研究所へ移ることとなり¹⁶⁾, 昭和 14 年 (1939) 4 月, 阪大を辞す.

4 月 28 日帰京. 岡田の祖父 (父の実父) はまもなく逝去. 永福町の家で, 養祖父母との六人の生活が始まったが, 同年 10 月 24 日, 祖父岡俊太郎も逝去. 父は実父, 養父との別れが続いたが, 丸ビルの中の準備室へ文献収集と研究のために毎日通勤した.

昭和 15 年 (1941) 12 月, 武蔵野に研究所完成. 当初は佐藤孝二氏・小橋豊氏, 三宅静雄氏, 能本乙彦氏, 河合平司氏の研究室があり, 岡研の談話会には, 高見昭氏, 久保亮五氏, 八角正士氏, 杉田元宜氏の方々. 昭和 19 年 (1944) からは深田栄一氏も参加された. 押田勇雄氏は昭和 26 年 (1951) から昭和 40 年 (1965) まで在職された. 父は高分子の誘電体論に転じたので, 大川章哉氏, 斎藤信彦氏, 池田勇一氏, 中田修氏等のおられた岡研は高分子物理発祥の地といわれた¹⁷⁾. 研究の雰囲気は活発で, 終戦直後から毎週開かれた談話会には,

東京方面の大学や研究所から多いときには 20 - 30 人の研究者が参加し, 戦後の一時期, 国分寺が物理研究の中心になった感があった¹⁸⁾. 大川先生は後年学習院大学教授となられた後もお親しくしていたが, 若くして鬼籍に入られた.

* Equation of OKA

昭和 17 年 (1942), 高分子の形態に関する統計力学において, 初めて, 鎖状高分子の内部回転のポテンシャルを考慮した分子の両端間の距離の二乗平均の式を導いた. このドイツ語論文は C-C 結合の周りの束縛回転を考慮した世界初の理論式であったが, 戦争中のため, 長年海外では知られず, 昭和 22 年 (1947) に米仏独の三名の学者が個別に発見した「Taylor-Benoit-Kuhn の式」と呼ばれていた. 発見から 27 年後の昭和 44 年 (1969) に, ノーベル賞受賞者 Paul J. Flory の論文の中で, 高分子物理の重要な理論式として初めて「Equation of OKA」と改められ, 大変喜んだそうである [写真 9].

昭和 44 年 (1969), ハイデルベルクで東健彦教授と共同発表した論文も, ある国際雑誌のレフェリーから「結論が常識に反する」という理由で論証過程の審査もされずに掲載を却下され, 認められるまでに 7 年を要したとのことである.

この頃もずっと腰痛に悩まされ、折をみてはあちこちの温泉へ湯治に行っていたが、余り効果はなかった。後年は東大整形外科で頑丈なコルセットを拵えて昼夜装着し、扇風機しかない当時、真夏には汗だくで汗疹がひどく、苦しそうだった。

*子供たちと学習院

日本が第二次世界大戦に参戦した翌春、昭和17年(1942)4月、祖母の父垂井重明(皇室博物館部長)の薦めで、私は女子学習院初等科の入試を受けて入学許可となる。華族以外の入学が難しい時代で、特高警察が家の近辺を調査していたそう。同級生56人の中で、電話のないのは我が家のみだった。見子も昭和20年(1945)4月に入学許可になったが、入学式の4月8日に、地下鉄渋谷駅で警戒警報発令になったので、登院せずに帰宅した。5月25日に青山の校舎は全焼した。11月に疎開から戻った陽子と見子は、学年末まで護国寺の仮校舎へ通ったが、道子は戦後の家計逼迫の故に世田谷区立松沢小学校へ通い、学習院へは女子中等科から入学し、見子に続き学習院大学を卒業した。茂は初等科から中等科2年の途中まで学習院に通ったが、健康上の理由で近くの世田谷区立松沢中学校に転校し、都立新宿高校から東大へ。現在は東海大学で障害児教育等を担当している。

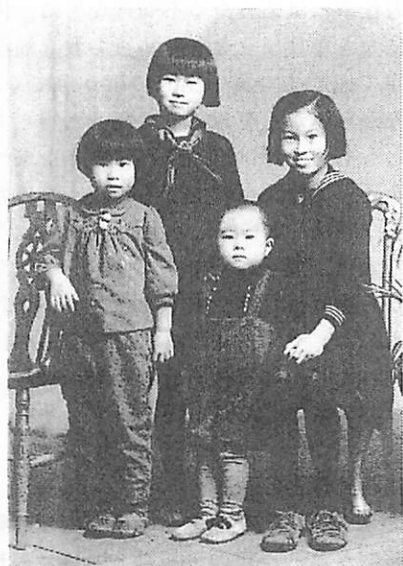


写真10：前列左から道子，茂。後列左から見子，陽子。
昭和23年(1948)11月20日。

(文博)宮内省立時代には授業料は不要だったが、昭和22年(1947)に私立学校になると有料(教職員の子供は半額)になった。長年に互る四人の子供達の学費は、両親には重い負担であっただろう[写真10]。

4. 第二次世界大戦

昭和16年(1941)12月8日、太平洋戦争が勃発し、日米開戦。

昭和17年(1942)10月17日、三女道子、日赤産院で警戒警報発令中に誕生。子供時代からとても健康だったのに、平成11年(1999)4月に病没し、夫熊田衛(生理学)も、2年後に、聖路加看護大学定年直前に娘鎌恵子と息子熊田清治を遺して急逝した。

父は佐藤孝二先生の次にドイツ留学が決まっていたそうだが、戦後の小林理研は財政難で、留学の機会が訪れることはなかった。昭和24年新設の学習院大学には、父の在職中には(私が短期長期の二度恩恵を受けた)安倍能成記念海外研修基金による教員の研修制度はまだ創設されていなかった。戦後、父は海外の学会から戻ると、家族に旅行のスライドを嬉しそうに見せてくれたものだった。初めは戦争のために、その後は職場を離れることができずに、楽しく有意義な留学経験を味わうことのできなかった父を、非常に気の毒に思う。

配給制度が始まると商品は店頭から消えた。陸海軍の嘱託(給料80円位)をし、月給の残りで国債を買い、小林鉦業(研究所の基金の出所)の株を買って備えていた由。隣組の訓練に召集されたある日、「米俵が担げなくて馬鹿にされた」と母に憤懣やるかたなく語っていたのを傍で聞いた。父は筋力ではなく、アタマで勝負していたのに。子沢山の貧乏士族の家庭で育った父は、「お弁当のおかずはいつも煮豆だったよ」と語っていたことから、成長期に頑健な身体を作ることではできなかったであろう。壮年期の戦時中は、僅かな配給物資以外の物品は、食料も衣類も、私共庶民には極めて入手困難だった。

昭和20年(1945)春の空襲で、家族で防空壕に入っていて、南方に火達磨になったB29が撃墜されるのを目撃した。「トッシャンのうちの方だわ。」と母が心配した。まさしく、それは上北沢の河瀬

の家を直撃したが、叔父夫婦は、防空壕に入っていて無事だった。

同年 4 月 6 日、4 年生の私は塩原温泉明賀屋旅館へ集団疎開した。5 月 25 日の B29 による大空襲で永福町の自宅の垣根も焼夷弾で被爆したので、その直後に母、息子、道子は仙台市にいた手島の祖父母の家に避難した。父は研究所近くに賄い付きで下宿した。

7 月 10 日頃に母、息子、道子は秋山朗伯父一家と、小牛田の奥に更に疎開した。父は塩原へ 1 回と、母達の疎開先へ数回、手に入れ難い炒り大豆などを持って、混雑する列車で往復して訪ねてくれた。まったく似合わない坊主頭に国民帽をかぶり、ゲートル穿きで煎り豆を持って訪ねてくれた夜、別館面会室で父のぬくもりに包まれて眠ったことをよく覚えている。いつ戦争が終わり、いつ家族が無事に再会できるのかの見通しのつかないことが、最も不安であった。疎開先で自宅全焼の知らせに泣き出す友人も出始めていた。

同年 7 月 13 日 長男茂、空襲警報発令中に誕生。食糧不足で母の栄養が不足して母乳が足りず、山羊の乳を貰っていた。湿疹や逆睫毛で医者通いをし、帰京後の幼児期には肺炎にもなった。

学童疎開先にも新型超巨大爆弾の噂が流れ、恐怖を煽った。

同年 8 月 15 日、隣の玉屋旅館で全員正座してラジオで終戦の玉音放送を聴いた。家族と暮らせると思い、ほっとしたが、虱まみれで帰京したのは、3 ヶ月後の 11 月 19 日である。戦争犠牲者の多い中で、身内や近い知人に直接犠牲に遭った方のないことは、犠牲者やその家族の方々には申し訳ないが、幸運であった。

空家にすることを禁じられた戦時中は家を貸していたので、同年 11 月初旬に家族が疎開先から帰宅しても、他人との窮屈な同居だった。半年後に六人家族で住むことになるまで、父の勉強机もなかった。

小林理学研究所は、朝鮮のタングステン鉱山からの利益で運営され、朝鮮の人々にも非常に寄与していたそうだが、敗戦で会社が接収された後は、研究費にも、所員の給料にも事欠いた時期があった。文部省科学研究費申請の責任者も勤めた。しかし病欠以外は日曜日でもあまり休まずに研究に

勤しんでいた。

昭和 21 年 (1946) 5 月、小林理学研究所主任研究員となる。健康状態は芳しくなく、以前からの腰痛がひどくなり、西永福駅までの間、1 - 2 回屈んで休んでから歩き続けることも度々で、そのようなときは母が鞆を持って駅まで送っていた。時々発熱し、気管支炎から肺炎にもなって、よく休んだ。研究費不足から、父の「物質構造の理論的研究」の研究部門は縮小され、音響・超音波分野が主体となって行ったので、仕事はやりにくかったと思うが、朝から夜かなり遅くまで在所し、コロキウムなども活発だったそうである。

終戦後数年間は非常な食糧不足に悩まされた。お鍋を持って配給のゆでうどんの行列に並んだ。主な蛋白源は米軍放出の配給のコンビーフ缶詰や祖父や近所の人が飼っていた鶏の産む卵などで、肉類や魚類が食卓に上ることは多くはなかった。いわゆる闇物資の調達はできず、30 歳代後半で成長期の子供四人を抱え、六人家族の維持に懸命な父は、闇市で一山いくらの鯛を新聞紙に包んでもらい、しばしば魚臭い鞆で帰宅した。生来虚弱の上に、戦争開始前から敗戦後数年までの 7 - 8 年間は、甚だしい食料不足からくる栄養不良のために体力をつけることができず、老年期の不健康の遠因となったであろう。仕事は頭脳とペンと紙で行い、力仕事にはまったく不向きなのに、休日には頻繁に大きなリュックを背負って殺人的混雑の満員列車で遠くまで買い出しに出かけてくれた。静岡辺りからみかんを背負って疲労困憊して帰宅したこともある。母は川向こうに借りた畑へ天秤で下肥を運んで野菜を育ててくれた。夏冬の制服のセーラー服は、すべて母の手作りだった。毎日、上の娘二人は、黒く齧くコクゾウムシを新聞紙の上で米から選り分けた。玄米を 1 升瓶に入れて搗いたりもした。ソックスに継ぎを当てるのは私の日課であったし、妹達と自分の手袋は毎冬 (人造の) スフの毛糸で編んだ。

5. 手島祖父母との同居

仙台の私有地を不在地主という理由で進駐軍の命令で接収され、一定の金額以上の預金も封鎖されて儉約生活を余儀なくされていた手島の祖父母が下井草の家を離れるに際して、引き取り手が

なかったで、父は自宅の離れに一間建て増しし、昭和23年(1948)5月頃から昭和41年(1966)春に祖母が亡くなるまでの16、7年間同居した。岡の祖父母と異なって手島の祖父母はユーモアがあり、一緒に暮らせて本当に良かったと述懐する。祖父は酔うと「さんさ時雨」を踊った。祖母の散らし寿司は桃の節句の私のレシピになっている。

祖父は樺島病院で心臓病で亡くなった。父は樺島病院の院長に請われて医師たちに講義をし、当時は高価だったペニシリンを茂のために分けて頂いたこともあった。

祖母の頭部にヘルペスができ、数年にわたり顔の左半分の神経が犯されて痛み続けたので、父は医学部の先生方をお訪ねしては祖母の診察をご依頼し、母が連れて行った。

6. 小林理研理事、学習院大学、「生命とは何か」、日本高分子学会副会長、「誘電体論」、*Reports on Progress in Polymer Physics in Japan*、「固体誘電体論」

*昭和24年(1949)4月、財団法人小林理学研究所理事となる。

*同年春、学習院が新制大学を設立した。秋、理学部新設に際し、理学部長の佐藤孝二先生のお招きで、学習院大学理学部兼任教授に就任。安倍能成院長と天野貞祐先生と三人で、学生勧誘のために何回か日本各地を行脚したこともある。安倍院長の浅間山麓の山荘を、両親と一緒にお訪ねしたこともあった。

*昭和25年(1950)頃、プリンストン大学滞在中の湯川秀樹博士から、Erwin Schrödinger, *What is Life?* (CUP, 1944初版)を贈られていたが、岩波新書から鎮目恭夫氏と共訳で「生命とは何か」(岩波新書, 1951年8月)を出版。私達に嬉しそうに話してくれたことを思い出す。(「岡小天文庫」が1冊所蔵。)発売直後から版を重ね、2005年12月に復刊して54刷であったが、2006年7月以降品切れで、2007年2月現在在庫はない。2000年夏、ケムブリッジのCUP直売店で*What is Life? With Mind and Matter and Autobiographical Sketches*を見つけ、引き合わされたような気がして思わず1冊購入した。

内村功学会長が2007年1月の「学会長のメッセ

ージ」で言及しておられるPascual Jordan, *Die Physik und das Geheimnis des Organischen Lebens* (1948)も、プリンストン大学在籍中の湯川博士より贈られ、「精読し、・・・原子物理学の碩学が生命に深い関心を示していることに打たれると同時に、生物物理はもはや異端ではないという安心感もでてきた。私の生物物理への関心は湯川さんに助けられることが多かった」¹⁹⁾と述べている。

*昭和26年(1951)、日本高分子学会が設立され、昭和27年(1952) - 42年(1967)、日本高分子学会副会長。

*昭和29年(1954)4月、「誘電体論」(岩波書店)を出版。

*昭和33年(1958)、*Reports on Progress in Polymer Physics in Japan*を発刊し、編集長。

この総括的な研究年報は非常に評価されて現在に至っているとのことである。

*昭和35年(1960)1月、「固体誘電体論」(岩波書店)を中田修氏と共著で出版。

7. 義宮正仁親王殿下

昭和27年(1952)春、義宮(現常陸宮)正仁親王殿下高等科2年より、昭和33年(1958)大学理学部化学科ご卒業までの6年間、傳育官を拝し、御殿や大学で物理学をご進講。昭和30年(1955)11月、殿下の成人式にはご招待状を拝受した。葬儀の際には御供物を賜った。

私は殿下と同学年で、偶々高1から殿下と同じクラブ(学習院輔仁会高等科理学部化学班)に所属しており、文化祭では男女高等科が合同で大学の一室を占めていた。還暦頃から理学部同窓会が復活している。

8. 東京都立大学、日本生物物理学会、国際血液学会会議、国際雑誌Biorheology編集委員・編集顧問、国際ヘモレオロジー学会、国際バイオレオロジー学会副会長、日本高分子学会名誉会員

*昭和34年(1959)4月、東京都立大学での高分子学科創設を期に、研究がやりにくくなった小林理研を1月に辞した。満20年に僅か2ヶ月ほど満たないだけの長期勤務だったが、3月まで勤めな



写真11： Alfred L. Copley 博士と岡 小天。昭和 59 年 (1984) 頃？

かったので退職金が信じられないほど僅少だったと母は嘆いていた。

山本三三三助教授，近久芳昭先生，大木新平先生，村田忠義先生方と研究及び学生指導を行い，慶応義塾大学の松信八十男先生方との研究会が休むことなく続き，張り合いのある時期であった。この頃の健康状態は普通で，真夏も自宅では肌着一枚で朝早くから夜遅くまで机に向かっていた。

*** 日本生物物理学会**

昭和 35 年 (1960) 日本生物物理学会発足。

*** 国際血液学会議**

昭和 35 年 (1960) 9 月，東京で開催され，アメリカから Alfred L. Copley 博士 (後年国際バイオレオロジー学会創設) が来日し，国際雑誌 *Biorheology* 創刊のために，玉蟲文一先生，神谷宣郎先生と懇談。コブレイ博士と親交を結ぶ [写真 11]。コブレイ博士から頂戴した 2 冊の稀覯本は愚息の希望で私宅に置いてある。

(1) *Alcopley, Heidegger and Hisamatsu* (Bokubi Press Kyoto, 1963) という英語のタイトル・ページと，「アルコブレイ，『聴きながら描きながら』。対談：ハイデッガー・久松真一。画：アルコブレイ」(墨美社，1963) という日本語のタイトル・ページと，*Alcopley, Heidegger und Hisamatsu und ein Zuhoerender* (Bokubi Press Kyoto, 1963) というドイツ語のタイトル・ページを持ち，英語，日本語，ドイツ語の文と黒の線画，墨絵，水彩画で構成されている書籍。(限定 800 部)

“To / my / dear / friend / Syoten / Greetings / from / Freiburg, New / York / and / Kyoto / with / all / good / wishes / as / ever /サイン? /Tokyo / 15, / May / 1975” という献辞の右側にアラビア文字で署名されている。このペーパーバックにはコブレイ博士の青い絵のカヴァーが掛けられ，更に茶色の和紙でできた厚い三つ折の和装ケースに収められている。

(2) L. Alcopley, *The Open Circle: Epigrams and Letter-less Writings* (New York: UNA Editions, 1984) . “Epigrams and Drawings by L. Alcopley” という墨の美術作品に英語で詩や警句が付けられているペーパーバックで，自費出版と思われる。“To / my / dear / friend / Syoten / with / all / good / wishes / and / warmest / greetings! /As / ever /サイン? /Tokyo / 30, / August / 1984” という献呈の辞の下に，アラビア文字の署名がある。

同年，東健彦先生と血管壁の張力について，新しい理論式を導く。

* 昭和 37 年 (1962) - 62 年 (1987) 国際雑誌 *Biorheology* 発刊。編集長は A. L. コブレイ博士とスコット・ブレア博士。

Vol. 1, No. 1 (1962) - Vol. 24, No. 5 (1987) : 編集委員。

Vol. 25, No. 1/2 (1988) - Vol. 28, No. 6 (1991) : 編集顧問。

* 昭和 41 年 (1966) 第 1 回国際ヘモレオロジー会

議で国際ヘモレオロジー学会設立。

同年 国際ヘモレオロジー学会が発展的解消をして国際バイオレオロジー学会になる。

*昭和41年(1966) - 昭和49年(1974), 国際バイオレオロジー学会副会長。昭和50年(1975)に深田栄一氏と交替。

*昭和43年(1968), 社団法人日本高分子学会から名誉会員証を贈られた。

北海道大学理学部に高分子学科を創設された古市二郎次期学長(就任前に逝去)の子息隆三郎(北大名誉教授)と見子が昭和38年(1963)に結婚。見子は北大で外国人への日本語教育に長年携わった。東健彦先生(順天堂大学)ご夫妻は、昭和42年(1967)に熊田衛と道子の縁を取り持って下さった。

この頃から家計に余裕ができ、6歳から長唄を始めて、結婚後の昭和12年に大阪で名取り(杵屋和十香)になっていた母は、東京で新しく弟子入りをして「杵屋勝くに香」を名乗り、自由にお稽古や国立劇場での発表会出演ができるようになった。演奏の日、父は杵屋勝国師匠に名入りの大きな花籠を贈り、客席でウトウトしていたものだ。道子も他界前に名取り(杵屋勝みち花)のお披露目をした。

9. 慶応義塾大学, 日本高分子学会功労賞, 杏林大学, ポワズィユ賞, 「レオロジー」, 藤原賞, 国際動脈硬化シンポジウム, 国際脈管学会議, 国際血液学会議, 日本バイオレオロジー学会

昭和46年(1971)3月, 12年間の充実感に満足して都立大を定年退職。

*同年4月, 慶応義塾大学日吉校舎で客員教授として医進課程の物理を受け持つ。松信八十男先生初め数名の方々もお手伝い下さった。没後細田泰弘医学部教授から母にお礼状を頂く。私は平成5年(1993)から平成12年(2000)に鹿児島へ転職するまでの7年間, 日吉校舎で英語の非常勤講師をしたが, 20年ほど前の父が同じ櫻の春霞や黄金色の銀杏を愛でたと思うと, キャンパスの土まで懐かしく感じられたものである。

*同年, 日本高分子学会創立20周年記念功労賞を授かった。賞の白磁の花瓶は母から譲られ, お正月にお花を生けている。

*昭和48年(1973), 慶応を定年退職し, 杏林大学客員教授。同年1月, 家の建て替え。

*昭和49年(1974)6月, 「レオロジー」(裳華房)刊行。現在も, スタンダードな教科書・研究書という役割を果たしているそうである。

*昭和49年12月30日, 第4回ポワズィユ賞を日本人で初めてイスラエルで受賞。父は *Biorheology: The official Journal of the International Society of Biorheology*, Vol 12, Number 3/4の表紙コピーに「謹呈 樋口陽子様 岡小天」と自署して, コブレイ教授にメダルを掛けて頂いている受賞時の写真コピーと, 同教授による“Poisueille Gold Medal Award Ceremony: Presentation Address”と, 父の“Poisueille Award Lecture: Present Status of Hemorheological Theory”のコピーを綴じて贈ってくれた。姉弟にも同様にしたと思う。今, 改めて父の私への思いを身に沁みて感じ, 当時読みもしなかったことが申し訳ない。後に深田栄一先生を同賞にご推薦申し上げ, 磯貝行秀先生へのご受賞が続かれた。今後も続くことであろう。

*昭和51年(1976)6月17日, 岡林篤千葉大学名誉教授と共に, 第17回藤原賞受賞。「過去に完成した主な業績」として, 「1. 内部回転を考慮した鎖状高分子の統計に関する研究。2. 複雑な物質の流動に関する数理的研究。3. ヘモレオロジーに関する研究。」²⁰⁾新聞には, 「数学で解く血液循環: 日本的高分子物理の草分け」という大見出しのついた記事が載った²¹⁾。父の発想力と数学の力は, 本当にすごいだろうと思う。藤原賞は後に実兄家武の妻子帰国の機縁となったことで, ありがたさが格別になった。

*同年夏, 第4回国際動脈硬化シンポジウム。

*同年夏, 第10回国際脈管学会議の特別講演で, 高血圧がコレステロールの浸透を早めることで動脈硬化を促進するというのを, 初めて流体力学的に計算して解明した。

*同年9月, 第16回国際血液学会議。

*昭和52年(1977) - 56年(1981), 日本バイオレオロジー学会を創設し, 初代会長。

10. 国立循環器病センター研究所

昭和52年(1977)6月, 武見太郎日本医師会会長と茅誠司氏のご推薦により, 国立循環器病セン

ター研究所所長を拝命。人事・運用面での雑務が多く、緊張し、研究の暇がなくなり、ストレスがかかる毎日。「忘年会で裸踊りをさせられるのも嫌なのよ」と母が私に述べたことがあり、心から同情した。

昭和53年(1978)、ストレスによる高血圧で入院し、病室からセンターへ通う。

昭和54年(1979)、胃潰瘍で1ヵ月半入院。研究時間がなく、仕事も不相当と考え、退職を考え始めたが、総長ほか大勢の方々や厚生省の役人方から慰留された。

昭和56年(1981)9月、退職。「定年前に止めたので、退職金は120万円だった」と母。

11. 盛亜州氏と馬(岡田)蒸

循環器病センターに在職中、「岡田家武の息子」と名乗るビエンチャンの盛亜州氏から、初めは中国語で手紙が来て、後に英語で多くの文通があった。吹田へも数回訪ねて来て食事をした。両親が家武伯父を話題にしても、彼からは息子としての親しみが感じられない。そのうちに馬蒸から、「岡小天の藤原賞受賞の記事を偶然に中国の新聞で見て、母親から岡小天という弟のいることを聞いていたので・・・」という手紙が届いた。盛亜州氏は馬植夫の近隣の息子で、中国風に義理の親子の縁を結んだ人らしかった。

注

- 1) 『森鷗外全集』第五巻 筑摩書房 第1刷、昭和46年。第16刷、昭和63年。542頁(注)。本文「伊澤蘭軒」243頁-342頁参照。
- 2) 『森鷗外全集』第四巻 筑摩書房 第1刷、昭和46年。第16刷、昭和63年。541頁(注)。本文「澀江抽齋」46頁-121頁参照。
- 3) 『森鷗外全集』第五巻 243頁。393頁参照。
- 4) 『読賣新聞』昭和56年(1981年)6月16日(火曜日)夕刊2版(2)。「顔」1443。
- 5) 佐伯修『上海自然科学研究所：科学者たちの

日中戦争』宝島社、1995年、83頁。『天産ナトリウム化合物の研究(其一)東部内モンゴル産ゲーリュサイトに就きて』は『彙報』第1巻第4号、昭和5(1930)年に128頁の長い論文として刊行された。

- 6) 佐伯、前掲書、82頁。
- 7) 岡田蒸の樋口陽子宛書面。2007年2月10日付。
- 8) 佐伯、前掲書、286頁。岡田蒸もそのように父宛の手紙に書き、後に語った。
- 9) 『中日新聞』昭和56年(1981)1月27日(火曜日)D版[10]
- 10) 『読賣新聞』昭和56年(1981年)6月16日(火曜日)夕刊2版(2)。
- 11) 岡小天「青春の記」『高分子』28巻、1979、60頁。
- 12) 岡小天「教育と研究と」『道：昭和の一人一話集 5』中統教育図書株式会社 昭58.3.28。76頁-77頁。[非売品] (『岡小天文庫』所蔵)
- 13) 岡小天「研究生生活47年」(「わが研究の思い出」)、『日本物理学会誌』第32巻 第10号 1977、810頁。
- 14) 同上 808頁。岡小天「インタビュー：物理学から生物学への道」『科学』Vol. 48, No. 11, 1977, 697頁。
- 15) 岡小天「青春の記」60頁。「研究生生活47年」808頁。「インタビュー」698頁。
- 16) テープ (『岡小天文庫』所蔵) A面：小林采男「創業の心」。B面：岡小天「ライフ・サイエンスの周辺」
- 17) 『小林理学研究所50年史』平成2.8.24。27頁。[非売品] (『岡小天文庫』所蔵)
- 18) 前掲書、29頁。
- 19) 岡小天「研究生生活47年」810頁。
- 20) 『第17回受賞者と研究業績』藤原科学財団、昭和51年6月17日、1頁。
- 21) 『読賣新聞』昭和51年(1976年)6月12日(土曜日)7版(6)。

岡小天の十七回忌に一学者としての父、家庭での父 (2)

2007年 樋口陽子*

目 次

12. 学士院賞、勲二等瑞宝章、Cardiovascular Hemorheology、名誉所長として帰京
 13. 日本物理学会名誉会員、「バイオレオロジー」、金婚式
 14. 『業績目録』
 15. ご友人方、お仲人
 16. 趣味、旅行
 17. 軽井沢と北軽井沢
 18. 入院、逝去
 19. 没後、Oka Memorial Award
 20. 父と私
 21. 岡小天賞と岡小天文庫
- 終わりに
注

12. 日本学士院賞、勲二等瑞宝章、Cardiovascular Hemorheology、名誉所長として帰京

*昭和56年(1981)6月10日、第71回日本学士院賞受賞。学者としてのこの名誉がどれほどか嬉しかったのであろう。『岡 小天博士 研究業績説明書』と、*The Recipients of the Prizes and the Outlines of Their Works for Which the Awards Are Made*の中の“Theoretical Studies in Biorheology”(英文紹介の抜き刷り)と、宮内庁長官からの招待状コピーに「六月十日に日本学士院でとりました写真を同封いたします スナップ写真で登壇しているのが私です 八月十日 岡小天 陽子様」と5行に認められた手紙を添えて、母も一緒に授賞式の大型集合写真とスナップ写真のカラーコピーを贈ってくれた。父は母にオシド

昭和58年の柄の色留袖を選んでいた(!)

1983年 *同年(1981)秋、勲二等瑞宝章受賞。

4月29日 *同年(1981)、Cardiovascular HemorheologyをCUPから出版。アパートの小さな書齋で、昼間の勤務から帰宅して夜遅くまで、一生懸命に書いていたことを母は記憶している。「泰子様・恒

晴様 祖父、陽子様 父」と献辞を書いて、嬉しそうに手渡してくれた1冊が、現在手元にある。(「岡小天文庫」は複写本を収蔵。)

ケムブリッジ大学英文科に訪問研究員として昭和63年(1988)から1年間在籍した折、大学図書館の書庫にこの本が納められているのを見届けた。CUP科学技術部出版部長のDr. Simon Mittonが、私の所属したSt. Edmund's Collegeのフェローで、父の本を覚えておられたので、10冊の購入希望を申し出た。NYの書庫まで問い合わせたが、すでに在庫はなかった。この英文著作は父にとっては渾身のライフワークだったと思われるが、再版もされなかった。母は「ケムブリッジの学生には、難しすぎて無理だったのね。」と達観していた。

数年前に神田の科学書専門の古書店に電話で在庫を尋ねた折、店主が、「岡小天さんがそんな本も出されたのですか？」と驚かれたことから、残念ながら日本ではほとんど出回らなかったであろう。

*同年11月、国立循環器病センターを退官し、名

* 鹿児島国際大学 [〒891-0191 鹿児島市下福元町8850]



写真12：金婚式。新宿中村屋にて。両親。昭和59年（1984）11月。

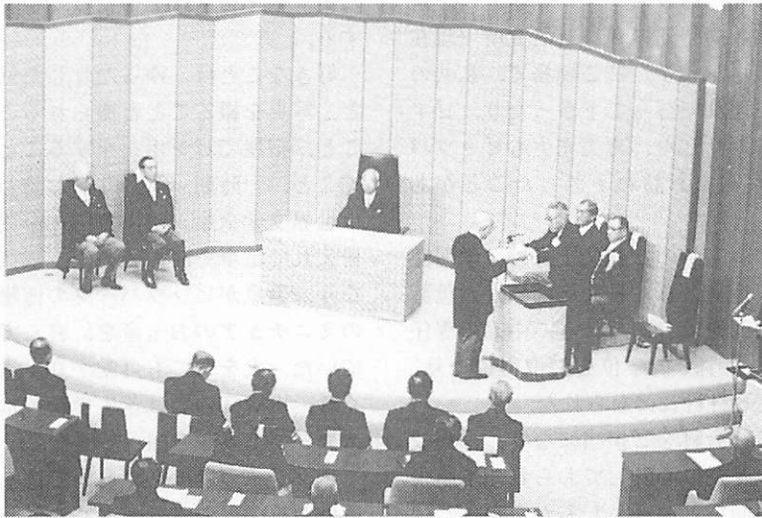


写真13：日本学士院第71回授賞式。昭和56年6月10日

誉所長として帰京。毎月、新宿の朝日生命成人病研究所で藤井潤院長の健診を受けることになった。

13. 日本物理学会名誉会員、『バイオレオロジー』、金婚式

*昭和59年（1984）、日本物理学会名誉会員。

*同年8月、『レオロジー』が『物理学選書 7 「レオロジー—生物レオロジー」改訂第4版』として発行された際に『バイオレオロジー』（裳華房）と改訂改題されて出版された。

*同年11月、新宿中村屋で金婚式を祝う [写真12]。学問の進歩に貢献しつつ苦闘の半世紀を越えたことを寿ぎ、ヴァイオリンで『金婚式』を弾

いた。

14. 「業績目録」

(1) 昭和46年(1971)5月, (2) 昭和54年(1979)3月, (3) 1930-1987年分を納めた冊子, の計3回作成し, 子供達にまで配ってくれた。(『岡小天文庫』が各1冊所蔵。)

15. ご友人方, お仲人

*ご友人方

ご友人方で特にお親しくさせて頂いたのは, 田上稜治ご夫妻, 原島鮮ご夫妻, 小穴純ご夫妻, 大川章哉ご夫妻, 大木新平ご夫妻, 近久芳昭ご夫妻, 長谷川正光ご夫妻, 中山龍ご夫妻, 池田正男ご夫妻, 深田栄一氏, 曲直部寿夫氏, 牧島象二氏, 齋藤十六氏, 坂奥喜一郎氏などを母は記した。

田上喜美先生は津田で母の3年先輩で, 長く汎太平洋会議などでご活躍なされた。ご令嬢田上由紀子先生(東大物理-ベル研-メロン研究所-筑波大)は樋口治郎と同時期にメロン研究所(現在のカーネギー・メロン大学)にご勤務で, 私共の子供達を博物館に連れて行って下さったり, ピアノを弾いて下さったりした。喜美先生もピッツバーグ市郊外の私共宅をお訪ね下さったことがある。

貝原眞・貝原学両先生のご尊父上様は, 学習院女子部で生物をご担当され, 私共三姉妹がお世話になった貝原友次郎先生であられる。中高の専任教員というご多忙の中で, 学位をご取得になり, その後(男子)高等科科長になられた。

学習院女子部で社会科をご担当になり, 一高校長だった安倍能成院長に心酔しておられた工藤張雄先生は, 一高の同窓というよしみからか, しばしば私共宅で父と歓談された。

外国の方では, Alfred L. Copley, Dintenfass, Fung, Wayland, Silberlerg, C. G. Caro, Sherman, Bourgoin, Y. P. Yuなど。コブレ博士が塩辛をお箸でつまんで, "Oh, cuttlefish saucer!" と珍しげにおっしゃったことや, 母が三味線を弾いたことを覚えている。ご令嬢も何度か自宅へ見えたそうである。

*お仲人

お仲人は頼まれ仲人も含めて20組ほどのこ

と。(ご氏名省略。)お年賀客のために, 暮に自由が丘のモンブランでケーキを24-30個買うのが, 結婚前数年間の私の役目だった。

16. 趣味, 旅行

*趣味

自由時間や余暇の少ない生涯だったので, 親戚からは勉強が趣味の変わり者だと見なされていたようだ。前の家には神棚もあった。仏壇には位牌や祖父母3組の写真も供えられ, 祖先の法要は几帳面だった。機嫌がよいと, ふざけてよく冗談を飛ばした。これは岡田の血統らしい。少し江戸弁。健康に恵まれず, 世間的な苦勞の多い生活だったので, 家庭では時には気難しく, 子供時代に不注意にお碗をこぼしたり, レコードを割ったり, 女中に当たったりした私はしばしば叱られたり小言を言われたりした。母を大事にしていた。新婚当初, 母が長唄「鶴亀」の手ほどきを試みたが諦めた由。絵を描けば上手だったのではないかと想像する。

好きなことは, ゆったりした気分で旅行すること。写真を撮ることと撮られること。落語を聴くこと。宿屋でピンポンをすること。海でのしで泳ぐこと。一時期, 海釣りにお誘われした。後年には世界文学全集(河出書房)を買い込み, 鞆に1冊入れて電車で読んでいた。戦後恐竜がブームになり, 愚息がピッツバーグの博物館で求めた恐竜のミニチュアのお土産を, 喜んで机に飾ってくれていた。犬をととても可愛がり, 次々と3匹飼ってくれ, 皮膚病の犬は芝生で硫黄水で洗い, 死ぬとスコップで裏庭を掘って埋めた。

ネクタイだけは必ず自分で選んだ。自宅ではお酒はお祝い事のみで, タバコは時々。恩賜の煙草は望む方に差し上げた。好きな食物の西瓜, すっぱい夏みかん, 外郎, 豆大福, コーヒー, クリームソーダはまあよいとして, 雲丹, 塩辛, 糖味噌漬, 佃煮, ステーキ, トンカツ, 筋子, いくら, と, ほとんど塩分とコレステロールが過多の健康に悪いもの。その上に日常的に過重な仕事によるストレスが加わった。血流や血管壁の研究の最先端を行っていたのに, 自分の高血圧や動脈硬化にまったく無頓着だったことが, 返す返すも悔やまれる。自身の健康管理にも熱心であったならば,

もう数年は寿命を延ばせたであろうのに。

*旅行

海外の学会へは何度か出かけ、帰国すると家族に写真を見せたり、スライド・ショーをして、旅の楽しみを分けてくれた。学会ではいつも同行の方々には囲まれて嬉しそうな笑顔だった。学術上の知的満足はもとより、初めて訪れた土地の歴史や風物に親しんだことを思い返し、自らも悦に入り、余韻を味わう風情が忘れられない。昭和37年(1962)、学会の帰途に、樋口が勤めていたNJのベル電信電話研究所へ初孫泰子に会いに訪ねて来て、私共には初めてのフィレ・ステーキをご馳走してくれたこともあった。

両親一緒の海外旅行では、昭和47年(1982)夏に、リヨンでの学会の合間を縫って、松信八十男先生、村田忠義先生、慶応の物理教室の荒川美恵子様、浜野明子様、叔母(母の妹)河瀬利子とヨーロッパやエジプトなどを巡った。母はこの旅行記を投稿し、準入選し、父は装丁した。センターを辞してから、北京、上海、万里の長城を数日間旅し、台湾を一周。海外旅行の度に、アクセサリ類や土地独特の珍しいお土産を買ってきてくれた。

国内旅行では、センター時代に愛媛大学での集中講義の折に、志賀健先生にご自宅でご馳走になったり、松山や瀬戸内海をご案内頂いた。夫婦で関西と九州の各地を(苗字と同じ岡城も、鹿児島も)訪れた。センター時代のお土産の定番が蕎麦饅頭と蕎麦ポーロだったので、今でも見つけるとつい買ってしまふ。

17. 軽井沢と北軽井沢

*軽井沢

昭和30年(1955)、母の従姉の夫故山本直文(なおよし)の軽井沢旧道の家の庭先に夏用の小屋を建てた。父自身は毎夏数日しか過ごせなかったが、家族に自由にに使わせてくれたのは家族への思いやりであろう。父の没後は専ら母、生前の道子一家、茂一家が利用した。(弟一家は現在も。)

伯父は大正6年(1917)、東京帝国大学文学部仏文科出身。学生は辰野隆と二人だけで、伯父は「2番で卒業した」と語り、伯母は「要するにビリだったのよ」! 単著のフランス語辞書類、学

習書、フランス料理書など著書が多数あり、レジョン・ド・ヌール勲章を帯びた肖像写真が鴨居に懸っていた。昭和50年(1975)、第1回食生活文化賞大賞受賞。昭和52年(1977)、勲三等瑞宝章。軽井沢で伯父を知らぬ者は「モグリ」と言われた。戦前は学習院高等科でフランス語を教え、目白の自宅で本場仕込みのフランス料理を生徒達に振舞い、戦後は学芸大学教授として別荘だった軽井沢から通勤していた。元草軽鉄道北軽井沢駅近くの牧宮神社に、伯父に言及した立て札が立っている。「日本のフランス料理の父」と目され、帝国ホテルの料理長とも親しく、「東京うまいもの100店」は類似本の先駆けになった。

*北軽井沢

私が風邪を引きやすかったので、転地の意味もあってか、初等科1年の昭和17年(1942)の夏と翌年の夏には、両親、妹(達)と北軽井沢法政大学村に借りた別荘へ草軽電鉄で行き、しばらく涼しく過ごした。初等科1年から3年までの夏休みには、仙台の祖父母の家にも、母と妹(達)と2週間ほど逗留した。

玉蟲文一先生のお誘いで、昭和31年(1956)に分譲中の北軽井沢音楽村に小区画の土地を購入した。カラマツの伸びるに任せて放置してあったが、亡くなる数年前に私が父から譲り受け、平成4年(1992)に小屋を建てた。父に泊ってもらったとしみじみ思う。近くに玉蟲先生ご令息方の2軒の山荘もある。昨年9月には音楽村開村50周年の祝賀行事があった。因みに玉蟲先生のご令嬢は学習院女子部で私の1級上、小谷正雄先生のご令嬢は1級下におられた。

18. 入院、逝去

*入院

昭和62年(1987)11月末、新宿駅で心筋梗塞を起こし、朝日生命成人病研究所付属病院に1ヵ月半入院。その後、平成2年(1990)春までに肺炎3回、気管支炎、親知らず抜歯などで数回入院し、体調不良で頻繁に通院。健康ならば、昭和63年(1988)7月から平成元年(1989)9月まで私が滞在していたケムブリッジに招きたかったが、とても旅行のできるような状態ではなかった。

平成2年(1990)1月から春まで不調。4月末、

足の親指が赤黒く腫れて痛む。毎月診察を受けていたのに、なぜ医者はこの血栓の兆候を見落とすのだろうか？ 診療ミスではなかったか？ 5月11日から5月21日まで、母が父にねだり、父にとっては非常に苦痛だった日本一周の船旅。

5月23日から2週間の予定の朝日生命成人病研究所への検査入院が、永遠に帰宅できない運命になろうとは、誰が予想しただろうか？ 勤務帰りに寄っていたが、入院後数日で、ベッドから降りて食堂へ歩いて行けなくなった。磯貝行秀先生、具原眞先生、中井正継先生がお見舞いに見えた折、腎臓が悪く、肺炎も起こしていたのに、「無重力場における血流の問題」という宇宙科学に関連する最新のテーマで、6月の奈良での学会の準備をしていたそうである。

例年、「父の日」には白百合か芍薬を持って訪ねることにしていたが、この時は母が「疲れて苦しい」と申したので、母の見舞いに行き、私もくたびれてしまい、病院へ行かないでしまった。これが最後の「父の日」になると知っていたら！！この日一日中、父は今来るか来るか、と病床で待ち侘びていたのに、四人の子供の誰も訪れなかったそうだ。悔いても悔やみ切れない。

6月中旬、午後愚息と私が見舞いに病室に着いた時には意識がなかった。熊田衛の忠告で急遽慶応病院に転院することになっていた。即日腹膜透析。意識が戻ってから数日後に「ここはどこ？」と訊かれ、病院の窓越しに信濃町駅を見せて上げた。

7月中はかなり回復し、いずれは自宅療養になろうと診断され、私は自宅での透析袋の交換方法をビデオで教わったりして、8月は安心して英国へ出かけた。イギリスから電話をする度に、母は「相変らずよ、あまり変わりはないわ。」と答えていたが、8月30日に帰国して病院へ回り、予想外の衰弱に驚いた。

9月に入り、病状が急速に悪化したのに、確か7日頃から10日間ほど、主治医は若い研修医を残してアメリカの学会へ出張してしまった。重症患者の治療より自分の業績を重視する者は臨床医として不適格だと心中大いに憤った。父はかつて慶応義塾医学部で教えたので、直接に授業を担当しなかったにせよ、担当医の先生筋に当たるのだから、

手厚い治療と介護をして頂けるといって医道モラルの幻想を私は抱いていたのだ。やがて歯茎が痩せて、入れ歯を二度調整しても合わなくなり、病院の硬い食事が摂れなくなる。お願いしても、病院では軟らかい食事は出して頂けず、自宅から届けるように指示された。(病院の食事を辞退しても、食費は計上された。) まもなく自宅から持参した食物もほとんど喉を通らなくなった。欲しかったおみおつけとコーヒーを持参したが、「むせると危険」と止められた。一生の終わりにどれほど好物を欲したか、せめて一匙、舌を潤して香りを味わわせてあげればよかった、と思出す度に悔いている。乾いた口は脱脂綿で湿らせた。細い手首から、常に嵌めていた愛用の腕時計が抜け落ちてしまった。声が全く出なくなり、手に力が入らないので、フェルトペンでホワイトボードに書く文字も判読不可能になって、父からの意志の伝達ができなくなった。やがて瞼の筋肉も弱って、眼が開けられなくなってしまった。手の握り具合で、見えなくてもこちらの声は聞こえていて、頭脳は働いていると思えた父にとって、インプットはなされてもアウトプットできないことは、どれほど辛いことだったのだろうか。言い残したいことが山ほどあったに違いないのだが、私は精神が閉塞状態で、何もよい方法を思いつけなかった。次第に嚥下ができなくなり、看護婦が痰の吸引をするとき、とても痛そうに顔を顰めた。

9月20日に重態になって、母が介護人を二人頼んだ。彼女らは自分達が仮眠をする毎晩2時間、その日の気紛れで7時から9時とか、8時から10時とか、9時から11時に家族が付き添うように母に求めた。母は当然ながら「疲れて無理」、2ヵ月後に乳癌が発見されることになる道子は「体調不良」、茂は「嫌だよ」と断ったので、北大で日本語講師をしていたが代講を依頼して上京していた息子と、女子部専任教員・大学兼任講師として週6日勤務の私とが、夜は4対2か3位の割合で交替に付き添うことになった。私は勤めは無欠勤、無遅刻、無早退で、東十条-高田馬場-信濃町-東十条と通った。9月下旬の運動会予行の前夜は病院に泊った。末には運動会。10月半ばから中間テストが始まると、父のベッド際で採点した。帰宅途中に忘れ物を取りに深夜病室へ戻ってみる

と、父はまことに静かで、介護人は熟睡していたものだった。父が人生の他のすべてと同様に、真剣に、ひたすら死への道を辿っているとは、信じたくなく、信じられもしなかった。

*逝去

10月19日、夜11時半頃、病院に泊ろうかと思ったが帰宅した。介護婦が「足に触ってごらん下さい。冷たいでしょ」と言った。その意味を知ってさえすれば泊っていたのに。

翌10月20日朝、勤務校へ「危篤」の電話が入り、タクシーを飛ばしたが、眠ったまま意識を回復せずに亡くなった5分後だった。

医師の希望で解剖され、動脈硬化、腹部大動脈瘤、腎不全、血栓などの多臓器不全と知らされた。毎月健診に通っていたのに、どうしてもっと早く病気を発見し、もっと早く治療を開始して頂けなかったのだろうか、という疑問がいつまでも残る。病気を見逃した健康診断の医療ミスではなかっただろうか？ 5月の入院時には2週間で退院すると思っていたのに、一度も帰宅できず、身辺整理もできず、然るべく別れも告げられなかったのは、非常に心残りであっただろう。意識のあるうちは恐らく死ぬことを予想しておらず、長年住み慣れて愛着のある住まいを一目見ることすら叶わなかった父を、せめてこの晩は自宅で寝かせて上げたかった。

「ある朝、眼が覚めなかったらどうしよう。こわいなあ。」と時たまふざけ半分に言っていた父は、気軽な検査入院から僅か5ヶ月もせずに、嵐のようにあの世へ駆け抜けてしまった。義務を尽くし、責任を果たして、学問の世界と家庭での疾風怒涛の一生を真摯に戦い抜いた。やり残した仕事は心残りであったに違いない。だが今は此の世の労苦から救われ、肉体的な苦痛からも解放されて、天で懐かしい両親、兄、妹達、弟達や親友・畏友と再会して和やかに談笑している、と慰めるしかない。愛惜の念を込めて、「お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。」

10月21日、代々幡斎場でお通夜。向学院天道日仁居士。母も道子も茂も皆が帰宅した後、息子と私が大量のお皿類やコップを洗い、部屋の掃除をし、棺の父と最後の夜を過ごした。

10月22日、密葬の斎場から会葬者を昼食のレ

ストランへご案内する路上で、私は過労からくも膜下出血を発症した。死なずに復職できたのも、昨秋階段を落ちて父の祥月命日に退院できたのも、父が天で護ってくれたからだと思っている。

学習院には大変に迷惑をかけてしまった。後日、「介護休暇制度」の導入を提案したが、「時期尚早」と受け入れられなかった。父のバイオニアの苦勞に想いを馳せた。

19. 没後, Oka Memorial Award

11月3日の本葬は入院中で欠席し、葬儀の様子は後日妹弟や子供達から聞いた。小沼通二先生初め弔辞をお読み下さった方々、ご参列の皆様へ深く感謝申し上げる。退院後はかなり長期間にわたり療養と最低限の勤務の生活が続いたので、書籍を含む遺品等の行方については、後年印刷された追悼の記事や母の記録で知るのみであった。

深田栄一先生には、「小林理研ニュース No. 33-1 (1991)」（小林理研のホームページにも掲載中）、「高分子 40巻 2月号 (1991)」, *Biorheology* Vol. 28 (1991), 「生物物理：談話室」, 「臨床科学第28巻 第1号 別冊 (1992)」, 「日本の高分子科学技術史 人物史」(「高分子」47巻 増刊, 1998)などに、斎藤信彦先生は「日本物理学会誌 Vol. 46, No. 3 (1991)」に、磯貝行秀先生と深田栄一先生には *Biorheology* 第8回国際バイオレオロジー会議記念号 (1992) に Alfred L. Copley, Leopold Dintenfass と並べて追悼文をお認め頂き、心より御礼申し上げます。深田栄一先生は、Dintenfass 博士と父の記念シンポジウム、「無重力のバイオレオロジー」を開いて下さった¹⁾。多くの先生方から母にもご丁寧なお悔やみとお温かなお心遣いを頂いたようで、厚く御礼申し上げます。

平成3年(1991)2月頃、母は国際バイオレオロジー学会に百万円寄贈したそうである。平成4年(1992)、横浜での国際バイオレオロジー学会で、組織委員会は海外の若手研究者の参加を奨励するために Oka Memorial Award を設定し、賞は7人の研究者に Banquet の席上で贈呈された。M. A. Babizhayev (ロシア), T. C. Fisher (米国), J. Hu (中国), C. L. Liao (中国), J. Shao (中国), W. S. J. Uijtewaai (オランダ), J. C. Wang (中国) の方々であった²⁾。今回の会議で Chairman を

勤められた磯貝行秀先生に大変にご尽力頂いたことと感謝申し上げます。先生はその後3年間、国際学会の会長になられた。

同年6月頃、東海大学開発工学部運用生体工学科山口隆美教授(前国立循環器病センター勤務)に、母によれば *Biorheology* の全冊を含め、本棚一杯の洋書を寄付。

他の多くの方々にも書籍類、雑誌類、抜き刷り類、記念品を大量に差し上げ、「トラック数台分の書籍を処分した」と後日母は述べたが・・・一昨年の夏休みに、母と茂が新たに捨てる予定の大量の書籍の中から回収できた僅かダンボール4箱分と以前から所持していた書籍類とを合わせて、「岡小天文庫」にご寄贈させて頂いた。

けれども残念ながら、父が授かりました栄誉を表すメダルや勲章などは、今では所在不明である。

20. 父と私

読者にはご迷惑であろうが、研究に打ち込んだのみならず、「父」としても非凡で、力の限り尽くしてくれたことの一部を、思い出すままにご披露させて頂くことをお許し頂けようか。詳細は省くが、孫である娘も息子も可愛がって、年齢に応じて話し相手になってくれた懐かしい「祖父」であったことも、知って頂ければ幸いである。他の孫達へも年齢相応に可愛がってくれたと思う。

戦前は自転車に乗るお猿を見に阪神パークへ何回も連れて行ってくれたり、真鶴へ父母の弟妹達と一緒に海水浴に行ったりした。戦争開始後も小学生の私を代用食のランチを食べに連れ出してくれたり、満州匪賊の出る怖い映画へ(多分そうとは知らずに)連れて行ってくれた。戦後初めて国立科学博物館で見たミイラの首のショックは忘れられない。職場である小林理研の研究室を一度見せてくれた。学習院大学理学部の運動会だったか、小林理研の運動会だったかへ伴われたこともある。6年生頃に、まだケーブルカーもなかった高尾山へ二人で楽しいハイキングをした時に、すれ違ったアメリカ人が連れの人日本人に“I don't know.”と言ったので、「『アイドントノー』って何のこと?」と尋ねたら、「今にわかるよ」という答えだったこと。井の頭公園でボートの漕ぎ方を教わってから、緋毛氈で温かいおでんで温まっ

たこと。母、妹達一家、弟、子供達も一緒に伊豆への家族旅行で、旅館に「岡商店様御一同」の看板がかかっていたことは、植物園の色鮮やかなベゴニアや鰯と共に忘れ難い。動物が好きで、戦前は犬を、戦後は犬、猫、兎、鶏、金魚を飼ってくれた。

父とクラシックがどう結びついたのでか、最初のSPは赤ちゃんの息子を寝かしつけるためのハイドンの「セレナーデ」とシューベルトの「モメント・ミュージカル」だった。手回しの蓄音機と童謡のレコード数枚も与えてくれ、戦後は息子と私にヴァイオリンを習わせてくれた。ハイフェッツ来日するとき、日比谷公会堂でのコンサートの券を上げたことがある。院生の一時期、東京都民交響楽団のセカンド最後尾で弾いていたが、練習日の夜には、「夜道は危ないから」と、必ず西永福駅へ迎えに来てくれていた。

5年生の春にラジオでカムカム英語が始まると、すぐにテキストを買ってきてくれたが、朝6時には目覚めなかった私は、週末には落胆した父を大いに怒らせてしまう。5年生と6年生の夏休みと冬休み終了前夜には、等号の意味や掛け算と足し算の混合問題のわかっていない私を叱りながら、徹夜で算数の宿題の間違いを訂正してくれた。

まだゼロックスのない時代、日比谷のアメリカ文化センターへアメリカやイギリスの文献を筆写しに通うついでに、英語の絵本を借りてきて読んでくれた。その面白さが忘れられず、私共が二度目にアメリカ(ピッツバーグ)に滞在したときには、4歳の娘と3歳の息子に同じ絵本を買って読んだり、毎週巡回する図書館バスで絵本を借りて読んだものだ。

大学受験の数学と英語の特訓のために、息子も私も、(父の意向で)夏は1週間信州の宿屋に泊った。家でも夜、「持っておいで」と解析を教えてくれたが、私は眠気にかけてしまい、期待に応えられなかった。親類筋の駒場の英文の先生宅に連れて行ってくれた。留学応募を志した際には、英作文の先生を紹介してくれたりもした。私が自分の子供達に何をしたかを省みると、自らを恥じるほかに、父にはシャッポを脱ぐ。

同じ学習院に所属していたせいで、男子高等科の教室の黒板にまで、なぜか「岡小天」という落

書きがあったそうだ。あるときは、父が偶然に女子部の物理の先生にお会いしに来たために、私が物理の期末試験の時間を間違えて、追試でひどい点を取ったことがバレてしまったり、実力テストの情報もすぐに筒抜けになった。妹達も同様な目に遭ったのではなからうか？ 津田塾大学でも一般教養の物理は小林理研の押田勇雄先生、化学は学習院大学の井上先生だったために、成績は私より先に父に伝わる始末。卒業式には両親で出席して卒論の受賞を喜んでくれた。卒論と修論を装丁までしてくれた。

父が東京帝大助手時代に3歳年下の院生でいらっしやった近藤正夫先生は、後年学習院大学理学部長、大学長を務められたが、奥様は英文学の泰斗近藤いね子先生で、卒業後も半世紀にわたり、いろいろな面で導いて頂いた。「蛆虫の憧れる星」(Shelley)のような方である。

大学1年の新学期に戸張正実先生の「ドイツ文学」の講義に魅せられて、四月中旬から夏休み前まで都合のつく日はほぼ毎晩ドイツ語の初歩を教えてもらった。

靴はいつも新宿で買ってくれた。高校生にしてはおしゃれな靴を、私がうっかり応接間の窓を閉め忘れた夜に泥棒に玄関まで入られて盗まれ、叱られるまでもなく怖い思いをしたこともあった。靴の磨き方も父から教わり、両親の靴は磨くことにしていた。父は日頃古い靴を履いていた、大学院の入学祝のスイス製金時計を高田馬場と目白の間でラッシュ時に拘られときは、母が取りなして、再び買ってくれた。学生には贅沢なこのぜんまい式腕時計は、35年間以上使った。

父は光村図書(だったと思うが)から分厚い『高校理科』の教科書を出した。私が学習院女子部の教員になった時、学習院大学理学部物理学科卒業の塚田久幾先生は、この教科書を使っておられた。

学習院大学では、専門科目以外に一般教養の「科学概論」を担当し、原子から宇宙まで幅が広いので、教科書作成と同様、大量の本を読んでいたことを今思い出している。

幼児期、私は神経性食欲不振で、体も弱く、両親に非常に面倒をかけた。大学卒業以降は、当時ですら時代錯誤の家父長権行使が第一の原因

で、私は長年難儀した。しかし、晩年には、体力も弱り、非常に多忙だったにもかかわらず、私のために全力で最善を尽くしてくれた。このことが、父が一生を捧げた「学問」へのささやかなお返しを念じることになった大きな理由である。

21. 岡小天賞と岡小天文庫

*十三回忌が過ぎた頃、父が晩年に最も力を入れた研究分野の今後の発展を願い、かつ、遅まきながら父の私への慈しみに応えるものとして、深田栄一先生と貝原眞先生に日本バイオレオロジー学会への些少の寄付のお申し出をさせて頂いた。両先生のご尽力で、思いがけなく岡小天基金による「岡小天賞」という立派な賞を設立して頂き、望外の光栄である。第1回平成16年(2004)には磯貝行秀先生と梶谷文彦先生、第2回平成17年(2005)には貝原眞先生、第3回平成18年(2006)には浅野牧茂先生、第4回平成19年(2007)には神谷暁先生がご受賞になられた。

*また、内村功学会長のご厚志により、平成16年(2004)9月に、私の手元にあった僅かな書籍類その他の遺品を、「岡小天文庫」として会員の皆様方にご利用頂けるようにして頂いたことは何よりもありがたく、父も非常に感激していると思い、深く御礼申し上げる。書籍目録は学会のホームページに掲載して下さった。

終わりに

処世術に無縁の正直で純粹で誠実な善人で、非常な努力家でした。先見の明を備え、優れた先輩、同輩、後輩の方々に恵まれたのが、何よりの幸せでございました。父の一生は、自ら述べたように、「科学者の心の中にある自然への畏敬と感動の心」³⁾で貫かれていたと存じます。藤原賞受賞直後の新聞に、「スイスの著名な物理工学者がある雑誌の中で、岡さんを“慎み深い巨人”とたたえ、「会って話していると、“謙虚”という雲におおわれたアルプスの高山を連想する」と書いた」⁴⁾と載っておりましたが、これが父への最大の賛辞と捉えて、この上なく嬉しく存じます。深田栄一先生も追悼文で同じ語句を引用なさって、「スイスのあるレオロジーの研究者は、先生を謙虚の雲に覆われた巨峰と称えた。」⁵⁾あるいは“A

rheologist in Switzerland once praised him as a giant mountain hidden by a cloud of modesty.”⁶⁾と記して下さい、何よりもありがたく存じます。

学問上の詳細および父の随想の類につきましては、父自身の著作物及び作成した『業績目録』（「岡小天文庫」に各一部所蔵）をご参照頂ければ幸いです。研究歴の概略を記したリストは、「岡小天 インタビュー：物理学から生物学への道」（『科学』Vol. 48, No. 11, 1978, 698頁）に記載されております。家庭のことにつきましては、十三回忌に際して母に書き留めてもらった追想記、「岡 小天の思い出：生い立ちと日常」（「岡小天文庫」所蔵）に多く負っております。伯父故岡田家武に関しては、岡田蒸の書面と話、叔父故岡田和から譲られた書物、叔母岡田多栄子と父母の記憶によっております。草稿に関して、娘庄司泰子と愚息樋口恒晴にも世話になりました。資料が必ずしも手元に揃っているわけではございませんので、誤りもあろうかと存じます。お気付きでしたら訂正いたしますので、ご指摘頂けますれば大変にありがたく存じます。

注

- 1) 深田栄一先生より樋口陽子宛の1992年8月11日付けの私信。
- 2) 同上。
- 3) 岡小天「教育と研究と」『道：昭和の一人一話集 5』79頁。『道：昭和の一人一話集 7』に「筆者その後」掲載。（「岡小天文庫」所蔵）
- 4) 『讀賣新聞』昭和51年（1976年）6月12日（土曜日）7版（6）。
- 5) 深田栄一「私の恩師－北から南から－岡 小天先生」『臨床科学』第28巻 第1号 別冊，1992，142頁。
- 6) Eiichi Fukada, "In Memory of Syoten Oka — Biorheologist and Person: Obituary" *Biorheology*, 28 (USA), 1991, p. 128.

「岡小天の十七回忌に(1)」訂正

21巻2号, p23 左欄10行目

「次期学長」を「学長」に

「就任前に」を「就任直後に」に

11行目

「昭和38年」を「昭和39年」に